

〈修士論文要旨〉

古代造瓦組織の研究

岡 田 雅 彦*

本論では、古代における造瓦組織を復原することを目的とした。その方法として、瓦研究で一般的な軒瓦の研究ではなく、丸・平瓦を主なる材料として分析をおこなった。丸・平瓦は大量生産されるという属性を持つ。そのために、製作痕跡を詳細に研究することで、造瓦組織の復原をおこなえる可能性が高いと考えた。そのためには、一度に同一集団により製作されたものを、大量に分析することが必要である。そこで、大量の瓦が窯詰め状態で出土した栗栖野窯の瓦を分析に用いた。これを詳細に検討することができるのであれば、集団内における工具のあり方・工人のあり方・時間差が詳細に復原することが可能であると考えた。

これらをもとに栗栖野窯を分析した。まずは工具の分類をおこなった。

- ・平瓦は5枚造りの桶が1つ・布は3枚・叩き板5つ・同じ粘土・同じナデ板を使用する。
- ・丸瓦は布が1枚・同じ粘土・同じナデ板を使用する

また、平瓦と丸瓦で、同じ工具を共通して使用することから、丸瓦と平瓦を1集団が造瓦でおこなっていることがわかった。

次に「個」の分析をおこなった。丸瓦では、側面調整がほぼ半数で2種類存在する。また、この2種類で分け、他の属性に分けていくと、この2種類では工具は同じであるが、粘土貼付け手法が異なることがわかった。そのために、この集団には、少なくとも工人が2人いることがわかる。一方平瓦においては、明確に1人以上の工人が存在する可能性を指摘できる状況を、判断するのが難しい結果がでた。しかし、平瓦を1人で製作することは不可能である。そのために、痕跡では見えない工人が存在することを指摘した。平瓦の側面調整が丸瓦を製作する工人の片方と同じ調整をおこなう。それが平瓦で主体を占める事を指摘した。そのために、丸瓦を製作した2工人の片方が、製作が難しい平瓦では補助にまわり、痕跡が残らなかったためであるとした。これは、丸瓦・平瓦の工具が共通し、同時に作業ができないことから明らかである。

これらのことから、栗栖野窯では、1集団2工人の単位で操業していたことを明らかにした。これは、今まで研究されてきた内容と合致する。

以上の結果、1集団内の最小の単位というものが見えてきた。しかし、1集団に瓦工人が2人しかいない体制であったとは到底考えられない。小林氏の研究にもあるとおり、瓦工人をサポートする役割であった瓦工人の下位に仕丁というものが存在する。しかし、これは考古学的な研究において立証することはできない。そのために、実際には瓦工人のほかにその他の人間の存在が推定される。

また、叩き板を1集団で複数持っている状況が明らかになった。叩き板がまだ壊れていない状

態で新しい叩き板が採用され、それらの使用期間が重複しながら同時期に使用される体制であり、また布が新調されると叩き板が新調される状況でもあったようである。

最後に栗栖野窯周辺の窯出土平瓦を検討することで栗栖野窯の工人集団が属している生産組織の復元・動向を検討した。

結果、栗栖野周辺では格子叩きを主流とする集団と、特殊叩きを使用する集団に分けることができる。この集団は、一時期は同じ集団で瓦製作をおこなうが、叩き板は別々に使用する。しかし、次の段階になるとそれが崩れ1つの平瓦の中に、重複して使用されるようになる。最終的には、格子叩きのグループは岩倉から見られなくなっていく。

特殊叩きを使用する栗栖野窯は、特殊叩き専用窯である、木野墓窯から派遣された集団である。この集団は栗栖野窯で少なくとも2回瓦を焼いた後、木野墓裏造成地に移動する。この時、木野墓から新たな叩き板を持った集団が加わって、木野墓裏造成地は形成されていくことを明らかにした。

今回窯詰め資料を用いて、瓦が持つ全ての属性を引き出し、1集団内における工人の最小単位を復元できたことは評価できる成果であった。また、そこから、集団の上位の概念である栗栖野周辺の造瓦組織について検討してきた。このような大量な一括資料を分析することは、時間と手間がかなり掛かる作業であるが、瓦研究を進めていく上で重要な作業である。そのために今後、他の窯詰め資料でも、このような作業をおこなわれていくことを願う。

今後は、今回復元することができた造瓦組織の最小単位をもとに、さらなる大規模な瓦造瓦組織を検討していくことを目標にしていく。